刊行によせて －推薦の言葉－

児島 邦明
順天堂大学医学部附属練馬病院　院長・総合外科教授

昨今の CT 検査を筆頭にした画像診断の進歩は，いとも簡単に体内の臓器や血管，軟部組織を詳細に映し出し，診断に至るアプローチに欠かせないものとなっています．初期臨床研修医はじめ，若い臨床医の教育現場で，必須のモダリティーでもありますが，彼らにとってそれに必要以上に頼ることは，まさに“蟷螂の斧”が如きで，真の臨床力とはいえません．

病歴や身体所見，体の変調を示す血液や尿の変化などが，診断にとって最も基本的で，普遍的なアプローチであることには，言を俟ちません．患者の体から発せられている声なき声に耳を傾け，視診・聴診・打診・触診，医師としての五感をフルに活用し，そして第六感を養い，ついには正しい診断に至る，まさに医師のアートの部分の教育，トレーニングは，多くの症例を経験し時間を費やして，はじめて培われるものでもあります．

本書は，検体検査，病理検査，診療応用編の 3 部構成よりなり，幅広い検査について，検体の採取や提出の仕方から，検査値を読み切るポイント，グラム染色・尿沈査像・病理検査の見方など，臨床の現場で本当に必要な知識が簡潔にまとめられたマニュアルになっています．また，著者の小倉加奈子先生，三宅紀子先生，小栗豊子先生は，普段から臨床研修医の指導に携わり，臨床検査や病理検査を通じて，診療科を問わない幅広い知識と経験をもっており，本編だけでなくコラムの「コーヒーブレイク」を通してもわかりやすく解説しています．

血液や尿のわずかな変化から病態を推理し，診断へどうやって結びつけ，正しい診断に至るか，本書が若い先生方

の, 本物の臨床力を涵養する一助になるものと確信します. 初期研修医はもちろん, 広く医学生や若い指導医クラスの先生方にも, ぜひ読んでいただきたい, 今までにないベッドサイド・マニュアルとして推薦いたします.

松本 俊治
順天堂大学医学部附属練馬病院　病理診断科教授

医学は常にあらゆる領域で進歩を続けている. 臨床検査医学, 病理診断学は臨床医学部門では「縁の下の力持ち的」な役割を果たしてきたが, 近年になり両セクションの重要性が増し, 選択コースとして臨床検査科, 病理診断科を選択する臨床研修医が増加し, また研修終了後の医師からも臨床検査, 病理診断を究めたいとの希望が増加している. 臨床検査医学, 病理診断学は最新機器の導入, 免疫検査の進歩, 免疫組織化学の応用により「コペルニクス的な転換」をとげ, 最新な検査・診断部門に変わってきている. しかしながら臨床検査, 病理診断の最新の知見をまとめたハンドアウト的な書籍は発刊されていないのが現状である.

小倉加奈子先生は順天堂大学医学部附属練馬病院で臨床検査科, 病理診断科の臨床研修医教育を行い, その教育過程で臨床検査, 病理診断の最新の知見をまとめたハンドアウト的な書籍の必要性を痛感し, 三宅紀子先生, 小栗豊子先生の協力を仰ぎ, 3 先生でこの素晴らしい著書を上梓された. このことより, 本書は検体検査, 微生物検査, 細胞診検査, 病理診断のすべてのセクションをきめ細かく網羅し, しかも最新の知見が多数含まれている著書である.

本書が臨床検査医学, 病理診断学を学ぶ医師, 学徒にとって大きな貢献をすることを信じ, この書にあらゆる賛辞を惜しまない.